主日礼拝説教 「管理人募集中！」

日本基督教団石神井教会　2019年8月25日

【旧約聖書日課】エゼキエル書　12章21～28節

21また、主の言葉がわたしに臨んだ。22「人の子よ、イスラエルの土地について伝えられ
ている、『日々は長引くが、幻はすべて消えうせる』というこのことわざは、お前たち
にとって一体何か。23それゆえ、彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。『わたし
はこのことわざをやめさせる。彼らは再びイスラエルで、このことわざを用いることはな
い』と。かえって彼らにこう語りなさい。『その日は近く、幻はすべて実現する。』24も
はや、イスラエルの家には、むなしい幻はひとつもない。気休めの占いもない。25なぜな
ら、主なるわたしが告げる言葉を告げるからであり、それは実現され、もはや、引き延ば
されることはない。反逆の家よ、お前たちの生きている時代に、わたしは自分の語ること
を実行する、と主なる神は言われる。」

26主の言葉がわたしに臨んだ。27「人の子よ、イスラエルの家は言っているではないか。
『彼の見た幻ははるか先の時についてであり、その預言は遠い将来についてである』と。
28それゆえ、彼らに言いなさい。主なる神はこう言われる。わたしが告げるすべての言葉
は、もはや引き延ばされず、実現される、と主なる神は言われる。」

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙一　1章1～10節

1パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれている
テサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにあるように。

2わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のこ
とをいつも神に感謝しています。3あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、
また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わ
たしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。4神に愛されている兄弟た
ち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。5わたしたちの福
音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とに
よったからです。わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働
いたかは、御承知のとおりです。6そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊によ
る喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、7マ
ケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。8主の言葉が
あなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神
に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要
はないほどです。9彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、
わたしたちがあなたがたのところでどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのよ
うに偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、10更にま
た、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神
が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスで
す。

【福音書日課】ルカによる福音書　12章35～48節

35「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。36主人が婚宴から帰って来て戸をた
たくとき、すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。37主人が帰って来たと
き、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。はっきり言っておくが、主人は帯を
締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。38主人が真夜中に
帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。39このこ
とをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、自分の
家に押し入らせはしないだろう。40あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけな
い時に来るからである。」

41そこでペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。
それとも、みんなのためですか」と言うと、42主は言われた。「主人が召し使いたちの上
に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした忠実で賢い管理人は、いったいだ
れであろうか。43主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸
いである。44確かに言っておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。45しか
し、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだ
り、酔うようなことになるならば、46その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰
って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。47主人の思いを知りな
がら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。48
しかし、知らずにいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。すべて
多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」

「わたしたちに倣い、主に倣う者に…」

礼拝予告に貼りだしている看板をご覧になったという方からお問い合わせがありました、「求人ですか？」と。お話しの様子から真剣に求職されているようでしたので、申し訳なかったのですがはっきりと「いいえ、違います」とお答えしましたが、電話を切ってすぐに後悔しました。「せっかく目を留めてもらったのだから、礼拝にご案内できるように話せたらよかったのに」と。ここに来てもらえたならば、誤解はもちろん解けたでしょうし、何よりもここにいる皆さんに接していただけたでしょう。皆さんに触れてくだされば、きっと、「わたしもこの人たちのようになりたい」と思ってもらえたでしょう。そうなるために、わたしたちは皆、毎週、ここに集められて来ているのです。

「そんな自覚はなかった」という方もあるかもしれません。「そういう役割は、牧師や他の人にお任せします」と。けれども、わたしたちは皆、先達の信者を模範として信仰の歩みを始めてきました。互いに倣い合うことを通して、主イエスに倣う者とされてきました。それは、わたしたちが皆、神に似た者、神の子としてこの世で生きていくようになるために、ここ教会に、神の家に、集められてきたからです。今日の使徒書で使徒パウロに「**あなたがたは…わたしたちに倣う者となり、そして主に倣う者となり…すべての信者の模範となるに至った**」と言われているのは、皆さんのことに他ならないのです。

「主の言葉」が響き渡る

「そうは言っても、教会に、倣うべき良い模範となる人がいるでしょうか」と問う方もあるかもしれません。「もちろん、います」と即答してくださる方は、幸いな方です。実際には、「模範となる人を見つけることはできなかった」と結論づけて、教会から去って行かれる方があることも事実です。本当に、模範となる者が教会にいなかったのなら、それも仕方ありません。けれども、礼拝に加えられ、御言葉を聞かれている皆さんは、すでに模範となるべき一人ひとりでいらっしゃるはずです。主の御言葉は、皆さんの耳に入り、心に届いたときから、主の御心として皆さんという器で現実となり始めているはずだからです。

前任地の教会で長く教会学校の子どもたちを夏期学校に連れて行っていた施設の館長さんが、到着した子どもたちを前に必ず注意事項を話されたのですが、一通り話されると必ず最後にこう加えられていました、「いくら言ってもあなたたちが注意を守らないのは、人の話しを聞いていたのに忘れてしまうからではなくて、そもそもちゃんと聞いていないからだ」と。そして、注意事項を全部もう一度繰り返すのです。ちゃんと聞かせるために、です。

もちろん、話しをちゃんと聞いてもらうためには、話し手の責任も重要です。わたしども説教者も一人の話し手として、不十分ながらも、皆さんに伝えたいという思いをもって、伝わるようにと言葉を尽くして、語ります。そのとき大事なことは、内容が理路整然としているとか、能弁であるとかということ以上に、目の前の聴き手の思いに心致すことかもしれません。

わたし自身は、日曜日の午後にはいつも、「今日はそのことができていただろうか」と不安に苛まれるのです。それでも、懲りずに、逃げ出さずに、次の日曜日には再び、皆さんの前に立たせていただきます。それは、わたし自身、一人の聴き手として、お語りくださる方の言葉に耳を傾けるときを一週間、過ごさせていただく者だからです。このわたしのために、思いを尽くして、言葉を尽くして、語ってくださる方があるのです。その言葉を、わたしは、聞き流せないのです。忘れてしまえないのです。耳に入り、心に届くと、わたしの中でこだまのように繰り返し響き続けるのです。そして、わたしの中で幾重にも重なり合い、大きくなった響きは、わたしが皆さんの前で口を開いたとき、おのずと言葉となり、響き始めないわけにはいかなくなるのです。

使徒パウロは、テサロニケの人たちに「**主の言葉があなたがたのところから出て…響き渡った**」と語っています。それは、まず何よりも彼らが「**御言葉を受け入れ**」たからです。パウロのもとから響いて来た言葉を、彼らは主の御言葉として受け入れました。それは、単に知的に学んだということではなかったのです。彼らは、御言葉を受け入れたので、その言葉を響かせてくれた使徒たちに「**倣う者**」となりました。その言葉の根源にある主の御声の響きを知って、「**主に倣う者**」となりました。言葉を受け入れるとは、そういうことです。言葉を発した者に倣うようになるのです。倣わざるを得なくなるのです。言葉は、それを発した者の人格と堅く結びついたものに他ならないからです。

「忠実で賢い管理人」として

福音書日課（ルカ 12 章）の主イエスは、たとえで語られた教えのまとめで、「**主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思い通りにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる**」とお語りになられていますが、本音を言えば、「そんな振る舞いをする僕などあり得ない」とおっしゃりたかったのではないでしょうか。主人の命じる言葉を真剣に受けとめ、主人の思いとして知るようになったならば、それを我が事として行わないわけにはいかなくなる。そうおっしゃりたかったのではないでしょうか。

もちろん、主イエスとて、世の主従関係が必ずしもそれほど麗しいものではないことをご存じだったでしょう。だからこそ、不忠実な僕のこともたとえとしてお語りになられました。けれども、主イエスがここでお語りになられているのは、人間の主従関係ではありません。神と人との関係です。主（人）である神は、僕である人に、お語りになられるのです。ご自身の思いの丈を伝えようと、ご自身の御心を知らせて同じ思いで振る舞う者となるようにと、聞くことの遅いわたしたちのために繰り返し、お語りになられるのです。

主イエスがこのたとえをお語りになられたとき、弟子のペトロは尋ねました、「**このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか**」と。主イエスは、ご自分の近くに集められた弟子たちにお語りになられたのです。教会に集められたわたしたちにお語りになられているのです。「**あなたがたを、忠実で賢い管理人として立てる**」と。それは、主の召し使い＝僕たちに「**時間通りに食べ物を分配させる**」ための管理人（オイコノモス）です。主が召し集められる者たちのために、食事の給仕をするように仕える管理人です。主は、そのような管理人を募られて教会にお集めになり、皆さんをその職務に任じられたのです。

そのような役割はご免だ、と思われるでしょうか。けれども、それは、神ご自身がなさってくださっているお働きに他ならないのです。だから、主イエスは、このたとえの教えで、とても奇妙なことをお語りになられました。その家の主人は、僕たちが目を覚まして待っている家に帰ると、僕たちに仕えさせるのではなく、食事の用意をさせるのでもなく、自ら**帯を締めて**、その**僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕**を始める、と。あり得ないことですが、主人である神はそういうお方だというのです。主イエスは、そのようなお方として主なる神を知っていらっしゃったのです。確かに、荒れ野を旅する民にマナを与えられたのも、預言者エリヤに食事を与えられたのも、主なる神であったと、聖書は告げています。主イエスは、そのような神の御心を、知るようになられていたのです。

主イエスは、だからこそ、ご自身、五千人に食事を与え、最後の晩餐の席では、弟子たちに向かって「**わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である**」（ルカ 22:27）とおっしゃられたのでしょう。だからこそ、教会は、牧師を聖餐の給仕をする者として任命してきたのでしょう。

主に給仕していただいた者は、主の忠実で賢い管理人として任じられます。主に倣って、給仕する者として、主が召された者のために仕えるようになるのです。